



鳳朗菱句集二編

下





附録

| | | | | | | |
|-----|---|---|---|---|---|----|
| 名月子 | 成 | 隆 | 久 | 山 | 系 | 梅室 |
| 号 | 也 | 同 | 一 | 初 | 音 | を |
| 二 | 屋 | 敷 | | | | |
| 紳 | 多 | 人 | 也 | 重 | の | 上 |
| 一 | 仕 | 事 | | | | |
| 蓬 | 芽 | 也 | 水 | 何 | つ | かん |
| 真 | の | 流 | | | | |
| 匡 | 留 | の | ち | 子 | 皆 | 候 |
| ハ | ツ | 子 | 外 | | | |
| 棟 | 也 | 心 | つ | そ | ふ | 葉 |
| の | ま | り | き | | | |
| 夕 | 海 | 也 | 水 | の | 人 | を |
| 水 | | | | | | |
| 素 | 尺 | | | | | |
| 梅 | 通 | | | | | |
| 杜 | 蓀 | | | | | |
| 芥 | 廬 | | | | | |
| 九 | 紀 | | | | | |
| 有 | 節 | | | | | |

うゝいきや野風山を吹くつ
 子りやの先よなるや福はじ
 見え遠く河をと暮修や樹の内
 つとよ一重なりけり初花魚
 一枝よ片ぬ其なるの集る車
 能見るやよその初船鳴り何れ
 水のちよよまき河やうやさく橋
 隣るまよ種まきも種力丸
 海去網の打はまき書に初産
 佐藤 赤明 始伊 石堂 丈孝 石外 岳層 舞左 素屋

六月や勤るぬあよ重のり
 ねりやうし楽を山路や出る初葉
 字外の十予ある柳の車
 船去まよ友ふや一なる初赤花
 ねハ信の力とくもや権のうめん
 雨化るまよ一しか散る下る月てん
 書しや子打一りア見え下雪の山
 ね、一重の縁の叫べや重の集
 教しうし高を持りし初一葉
 松濤 孝一 松雪 林曹 甘山 白鷗 曲岸 大乙 解堂

有る秋の伊筋^{イナ}へ^イく^イは^イの浦^{ウラ} 似葉
 乃^ナも^モの^ノを^ヲも^モ子^コ房^トる^ルや^ヤ崎^{サキ}の^ノ重^カ 古和 可^カ橋^{ハシ}
 戸^ドき^キも^モ病^ヤを^ヲ治^シむ^ムさ^サる^ル戦^{タケ}き 古和 古^コ鏡^{カガミ}
 句^クの^ノ句^クや^ヤ出^デる^ルと^トま^マし^シて^テ田^タの^ノ裏^{ウラ} 和泉 此^{コノ}松^{マツ}
 亭^{テイ}外^{ガイ}て^テ水^{ミヅ}子^コあ^アる^ルさ^サる^ル地^チ産^{サン} 籠野 白^{シロ}丈^{サテ}
 句^クの^ノ秋^{アキ}人^{ヒト}も^モ老^{ロー}く^クく^ク来^キき^キ 籠野 亭^{テイ}送^{ソウ}
 極^{キョク}さ^サる^ル田^タも^モ又^{マタ}ん^ンあ^アる^ル留^ルま^マる^ル家^カ 南交
 削^{セツ}ま^マる^ル魚^{イサ}も^モ濁^{ナグ}さ^サは^ハは^ハ後^ゴ門^{カド} トクコ 可^カ行^{ヤク}
 句^ク子^コ寺^{テラ}の^ノき^キも^モむ^ムね^ネ松^{マツ}や^ヤ時^{トキ}る 本層

句^クも^モ世^セの中^{ナカ}や^ヤ心^{ココロ}を^ヲさ^サる^ルの^ノ世^セ 和泉 徳^{トク}
 約^{ヤク}初^{ハツメ}や^ヤ人^{ヒト}を^ヲま^マる^ルさ^サる^ルて^テま^マる^ル屋^ヤ 大素
 時^{トキ}斗^トる^ル香^{カウ}も^モ一^{イチ}次^ジハ^ハ雨^{アメ}の^ノ聲^{コエ} 可^カあ
 伐^{バツ}路^ロを^ヲま^マり^リて^テま^マる^ル牡丹^{タン} 楠^{クサノ}河^カ
 垣^ケ外^{ガイ}ハ^ハ信^{シン}者^{シャ}さ^サる^ル一^{イチ}梅^{バイ}の^ノ花^{ハナ} 柳^{ヤナギ}紫^{ムラサキ}
 名^ナ月^{ツキ}を^ヲみ^ミる^ルさ^サぬ^ヌ亦^{モト}毎^{マイ} 亦^{モト}常^{ジョウ}
 舟^{フネ}よ^ヨほ^ホる^ルま^マも^モ尾^ビむ^ムの^ノ横^{ヨコ} 楊^{ヤナギ}高^{タカ}
 橋^{ハシ}の^ノ縁^{ヘリ}を^ヲみ^ミて^テみる^ルや^ヤ下^{シタ}の^ノ門^{カド} 輪^{リン}笠^{カサ}
 約^{ヤク}上^{カミ}一^{イチ}人^{ヒト}も^モさ^サる^ル一^{イチ} 劫^{ケツ}相^{ソウ}魚^{イサ} 寸^{スン}長^{チヤウ}

名月やが 出流やうは 是ゆる山 名崎 文方
 等し 石ひあふてし 子高時句 把后 十席
 一々高もあつし 喜ん 美彦
 山寺や ありまの 元月 林士
 柏手のそと 帯して 初阿と 秋湖
 高ふるや ありま 月て 成る 日向 龍岳
 暮る月て ゆく 入るや 難の 壽 善子 双鳥
 初雪の中 冬玉の 初白月 秩冠
 とも月へ 灯籠の つと ね 福牛 了翁

今月とハ 号呼し 是 疾し たり 千和
 さき 原よ ゆく 是て 月の 出は 八 兼 伊水
 重入や 是る 門の 街 籠り 對了 东指
 之月も 高き 踏つ 時つ 是 能作 末柳
 月 澄や 人の ちり 八 路 何後 高泉
 空梅や 暮る 月の 遠く 初 鳳橋
 万代の 松風 あり 秋の 月 文多
 是 中の 消え 空より 初阿 思風
 秋の 月 松 海 暮 時 松丈

新鳥の如く暮るにけり恒の字
 小は時を待て待つ時白は
 高きし家も出る照射は
 是は悟りとわらぬ藤丸
 唐の是と考して春をねね
 逢えて磯へ通る礼若は
 木葉も持多し秋の山
 夕暮や板をの末の字の如
 る上へ汲る縁の新茶は
 史白
 新鳥
 来葉
 羽長
 下り
 桂宮
 落葉
 夷岳
 争海

恒枯もあまし白根や時以て
 拾い取てきてて世は抱一葉
 秋はくし待て思やわらむは
 思ふさきやききる縁の杜あ
 星崎の雲も時をてその門
 手の暮やまきりて思ふ如丸
 そよぐねハ舞色のさぬ芭蕉
 初はハるれはつまよ月の人
 空はハるれはつ十六秋
 茶雷
 万像
 約月
 涼枝
 順負
 虫躬
 虫園
 芦白
 百仙

待音やある人の程待遠き
川さきぬふゆきや守之若
川筋やねむけしる梅柳
水の明て春待つく月の能く丸
満ちるさぬあ葉の奥の月夜
懈ふよえて為連ぬ向の山
うれ春の出るしう梅の今ま
吹きわたし篠ゆきうつる雪丸
春やもつねよなう真の雪

一風
被二
梅乃
百之
西裏
茂翠
照耀
雪子
粟二

雪の昔八年く度うう
時を月もももきき志は
雪の枝鳥の枝も柳も
峰もハ灯も江もや深き
あはれしや表表はる年の雪
歩ぬ踏人の向ふや夜の中
梅のうれそは是てちる柳丸
二層とくおま持うらん
十月の年時さきうり床板

左一
右春
有向
橋風
輕丈
山月
木龜
積翠
宋仙

見とあるや時よ多の月 陸湖
 笑とて極る白鳥し 留る花 山
 梅を折る心もく合野風丸 宇均
 け煙の所くくくや 紅の柳 龜
 蓬草をくくくく向やうけ 推句
 山風の流や一野より 麻の聲 龍甫
 葉もむむむむ存く痛く 丘の家 癒吏
 何くくくく湖の上やうの月 木長
 若くくくくく字はく月を待た 号法

若くくくくく物の時く 福妻子 兼園女
 真白や秋のくくくく 宗雪
 二と夜子流はくくくく 龍翁
 暮一のくくくくく 佐智丸 卷夕
 相山や秋のくくくく 古層
 種くくくくく 庸
 若くくくくく 世様女
 菊て雪ハ言のつくや 秋の聲 雪外
 くのくくくくく 余程のくくく 化丹

古今のうへまのやまの麓
 人の出で尚小喜めく川原
 名の若きぬ中の時出はる葉
 引揚をせ替て世話をきり
 六月よある泣つまや秋の空
 今橋せよはねや海のもの
 人の手よあれとふり色し飛
 夕と暮し時のはるる木下
 初冬の足えして通りし木
 葉雄

心よりも多くて只枯る涙
 一巻のうへまのやまの麓
 町下ある月もくさぬ葉
 降と起し葉も枯る葉子
 木葉もあつた夕は
 候しは燃もるやぬ葉
 葉もあつた地もつる
 葉外と能の月の本
 葉もあつた葉もあつた

市橋
 好牛
 葉竹
 梅十
 既成
 題山
 素飛
 葉雄

一嵐
 盡通
 之使
 半潮
 希線
 踏池
 守谷
 菊池
 叶高

文行おねの暮のこの魚の月 播ナ 鴉雛
 菊下アゆる嵐の月の秋空ハ 可火
 松風ハ休む旨のけり秋の暮 播ナ 以雪
 冬あふぬ身朽くや枯尾む 播ナ 小年
 菊あふる子の菊入り 毎 糍 播中 香雨
 ともくし午得子出るや暮の水 播中 雪鳩
 月をえて梅よふ豆のなき秋ハ 安藝 概雨
 峰細るとしやうよりけりまき江 一鳥
 雪の灯のうつりて空のそよそハ 芦雪

梅子も持せしむや雪のむ 甘古
 水子えの枯木の秋や細月 一層
 菊下アえてえ葉あふるや百念のむ 菊年
 けりやんハきく年持柳丸 甘栗
 梅くぬ秋の心や竹の秋 細狭
 枝替る菊きいりり 菊の暮 和也
 後る春下りまき 替るや秋の樽 木古
 へりくのかよけりけり 玉あふり 士方
 へり合てるもせしむるや菊年ハ 一仙

木の葉うら流す月の糸ハ
 月の出てきくきききハ
 の抽てけりけりけりハ
 七夕や枝をぬるは舟上
 酒布や雲よころるての川
 袖はまき為りききぬ給え
 飛雪の時ききききハ
 名月や若くき何時よつに
 登り灯をいき離の踏くハ

梅思
 梅高
 左邊
 書風
 東化
 菴使
 菴句
 只馬
 橙水

うけきき余りけり梅高葉ハ
 舟影の程めきけり梅高葉ハ
 船頭や枝々出まけり梅高葉ハ
 名月や物影よる水の色
 又るんききききハ
 名月や州のてけり梅高葉ハ
 梅高葉若くけり梅高葉ハ
 船高の一吹よある川糸ハ
 船高を川抱えけり梅高葉ハ

不邊
 葉ハ
 西右
 不邊
 一梅
 寺曠
 梅程
 島津
 三梅

の松や萩ハ一夜よ明きまを
 体む百の葉も備ふ木の葉は
 朝鳥や人のあしきそあま
 是も鐘りも余りて言ふより
 車向や船抱え行新傳し
 向きやあつて渡せしそ袖は
 初むやすくんとくる乃の奥
 夕やよ山風さきよまねと
 矢ひまよ秋のきり下屋敷
遠江

金玉
 縁水
 月夜
 遠守
 重子
 秋景
 三岳
 完伍
 杜水

花吹や 孟宗穀の河まう風
 青柳や 積と信よううさ旬
 初花は やか松の上の春の月
 風りる 水もらんやうのそめ
 芦糸や 白のけらん初春
 そよまて 朝いんせねとらん
 漸木や 矢りそりさぬ重子
 獅子菊の端倒りり葉の苗
 まよもを やねとりのる 鶯葉は
遠江

猿句
 岸牛
 鳥谷
 遠山
 嵐
 重子
 の端
 重子
 作良

くまの舟るまきよまはりあまぬれ
船名の書とこはるや兼の是
山鏡や二ねとてり回しよ
月音くまのしりあし
あまのしりあまのしりあまのしり
えのやあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり

舟魚
石魚
馬小
乃小
字也
重底
通志
柳龜
五竹

あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり
あまのしりあまのしりあまのしり

一魚
士教
松守
重底
青鹿
梅小
喜三
重底
丹堂

作の重さし出て水ようりう
字のむ打いつゑても持あり
糸あまよ打て度格柄のむ
板下しとふと足付うり袖骨
号や頼も左の身てきき
柳より傳ふ季のけり峰の雪
山一り被ふも世にまきき
を息や踏付たり暮たのま
能おや出ぬ月ともおももる

簾水
白吟
真止
板骨
花水
茶砂
楠骨
呉丁

望みくハ咲も春もくし葉のむ
海山よ遠き柳のあやうな
新涼一まき水のりき力
生絹のおきもあふ蕨う丸
今つゝふ当もあふれと蕨の臺
心さよしや歩おねり小柳葉
多町の木みけりるや燈子一羽
甲持てててある穀のけりハ
まやまるとおもハきりけりむ

赤上
立字
近に
湯山
赤送
水糸
蕨送
白吟
水舟
活園

船入の句もいづれ出まらば
舟は 船
 一抱つてもゝる鳥や春の句
舟は 東柯
 何れ様てまゆりも通らば
舟は 風上
 下つても時ハ春命一月のア
舟は 橘屋
 一抱つても月ハ春命一月の為
舟は 桑園
 是を玉て水は流つて春の丸
舟は 常産
 今も桑葉は春の丸に
舟は 杜陵
 新取や時ハ春命一月の為
舟は 一枕
 舟よ是れは春命一月の為
舟は 春池

夕暮しは春命一月の為
舟は 松緑
 唐人出て又はくめり春の水
舟は 流葉
 春の丸の句もいづれ出まらば
舟は 傲翁
 何れ様てまゆりも通らば
舟は 布拍
 下つても時ハ春命一月のア
舟は 江波
 一抱つても月ハ春命一月の為
舟は 大着
 是を玉て水は流つて春の丸
舟は 卓史
 今も桑葉は春の丸に
舟は 柳意
 新取や時ハ春命一月の為
舟は 堪洲

| | |
|----------------|-----|
| 青きよすけのすの枯より | 源氏 |
| 能くしらむらと一廻の通し | 中 |
| 咲ぬ身も為ぬ身もなき梅より | 孝の里 |
| 酔わぬも酔わぬしそる新酒より | 乙良 |
| 身えやもさるの先や為し水 | 千布 |
| 秋風や重き枯りて通し | 克の |
| 船のハ赤もすてさつ | 清水 |
| うらうらもさるさうらぬ信の青 | 海島 |
| えきよよりししりさき柳より | 植更 |

| | |
|----------------|----|
| 舟のきりる青き涼き麓より | 月井 |
| えぬるやえんてさるむのさつ | さき |
| よ水のさるる舟田のさつ | 加島 |
| あきさるさき家をもあしり | 里英 |
| いつの舟の手入し海士の葉のむ | 素明 |
| 相話へまひる度智の余き | 世山 |
| 岸終てえぬ世の叫び | 古蒙 |
| 夕暮やふれのさるる手綱 | あさ |
| 舟東風や一ひ返して皆 | 文帯 |

素あはもすも無はき行へ
折ハ鳴るもの知つた秋の精
初空をぬき初よりを臨ハ
空をまいて初きううぬき
水もよへるよふ出るお茶ハ
心もくも水際行や秋の精
あふよふはくはもゆぬ柳
南啼や初よりしむ初よの音
はな秋のまはいついて子の音

終成
茶山
常朗
一瓢
樵急
重湖
巴使
西塘
素井

重ねてもあはきあぬやあ梅
山陰ハ月々の外のうはを
ぬき切らや解も指もその白
神風のそよよめぬ初ハ丸
山月やこねさきも海の子
あつらつたは子あはるまぬとハ
白のうさハ水もきくそは病の月
明際のををまは初の月おハ

葛古
の厚
重老
茶江
建布
御玉
梅丘
白柳
鳥露

船のまゝやふ二を船の車_の海
 とく_に船_にア_れは_きき_う初_時句
 き_うと_くと_青り_まく_梅の_月
 輕_まね_る音_し時_句の_響く_丸
 正_月や_打在_遊ふ_まく_とと
 麻_笛や_吹あ_る人_のお_もい_付
 白_の上_の月_や照_らす_の鏡_を抽
 一_つつ_了辭_義を_てと_く標_く丸
 名_月や_急生_れと_ある_底の_影
 芦_門
 文_靜
 一_之
 桃_谷
 素_山
 後_山
 月_山

ち_りて_る音_は好_まは_星連_歌
 二_星の_影を_てと_く標_く丸
 五_六寸_許と_きる_や女_郎む
 赤_まを_や高_のあ_る奥_の物
 福_りの_お切_ると_く標_く丸
 二_星の_嶺と_らや_高上_の川_の形
 路_をと_らる_よ標_く丸
 加_茂門_を尾_目と_きく_は
 推_の白_名虫_の心_をと_く
 舟_二
 相_山
 赤_鼻
 喜_長
 吟_鹿
 二_丘
 為_城
 二_葉
 燈_風

ものゝ葉よらうのうやまの門
ふさやほらうも替りて是は事
はやらうよらうのうて秋の枝
夕まを待やうまらう村枝
よらうの左やうもや梅のむ
まの海やうもまらうえまらう
まらう咲ぬ枝やカやむまらう
むのちるまらうまらう秋のむ
まらうまらう咲枝まらう山の葉

接泉
洗舟
西池
重琴
重雁
柳眉
采峰
水旭
聖泉

十七

まらうまらう咲枝まらう
二筋よらうのうらう枯柳
ふらうらうハまらうのまらうまらう
まらうまらう一筋まらう他の上
まらうまらう人まらう風持まらうまらう
風筋のまらうまらうまらうのまらう
まらうの秋まらう中の水まらう枯まらう
まらうまらう秋のまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらう

月徳
岩月
の門
如松
文志
水園
好南
芦葉
積樹

六

冥寺の芭蕉為るすの波きり
海草生や石の如珠の廻り
さきやうし篇きよは居す一時
何れやけりもあまのさ方ハ
船子余るけりや柳の初嵐
是よまほお葉子鳴き末古亭
烟や 雷りましてのるゑ
又て何るゑは茶時や梅のむ
秋の襟えき分るけりあ瀧し

一止
山阿
糸月
如重
清民
静文
遊阿
白三

陸天

所のえゆる里の名をきり時向ハ
春うつけハやうし何れも田舎ハ
出さるゑ一初くや春の月
まけりや海をえ下は言ふ
むしやうきけり編りし神楽唄
春の外あまもねあやうきの序
まつ襟を我ハをりたる堅に
本ハあまきき名を以初様
あまきき名を以初様

湖立
堀水
五重
英泉
由人
魯因
二葉
牡丹
雪山

廿九

古今や人又違へるもつ 信 三泉
 空よ渡りて消るやは忘の積 多よ
 果や海の上り時句重 和歌 小屋
 春柳のうき舟の動く 已有
 柔活して重し 耕重
 句近き薫りや梅の為明り 一帆
 しるや回一飛り海あり 揚重
 けりくると生砂流るは清水 安房 望高
 紫河むやたふよき 孝民

候しけり信のえてある 素重 上流
 情けや 珠子八枚の一重山 未成
 初をよし重きしき 柳塘
 湿重や山お柔の下明り 鴈菜
 最もせは句よ成り梅のむ 由儀
 其のつ重も重なり 底の深 下流 その女
 本重のこのく百成の故 重雄
 重しむる百の重き重なり 重安
 もつ東風の通うて 梶二

月よ白路の咲くもあまのつら
 鳥えせおし出ぬけて又ははの空
 きつ〜と叫ぶのも〜牡丹は
 菊あきさや〜法衣も多作の飯
 春向の聲あ〜〜種よ移
 初初の春は〜〜も音〜
 茶角も重傳出でて秋の仲も
 や〜〜もやりね〜〜松のむ
 秋風も温泉の香〜〜枯梅は
下毛

春初〜〜まき白路も秋のむ
 一方〜〜は〜〜は
 初鳥も雪の蒼を〜〜河下る
 兎の月の初〜〜福寿草
 又〜〜ふ〜〜松の月見は
 鶴の相をのほ春月の白初は
 梅雪の吹〜〜お〜〜丸け
 雪や〜〜も〜〜秋の種
 鳥〜〜は〜〜鹿の茂〜
上毛

未定
 嵐高
 音音
 桃仙
 竹崎
 六園
 共矢
 申漢
 吉什

貴河
 藤外
 石足
 逸美
 喜山
 柳女
 琴堂
 如標
 長年

似て尋りてきて重き一飯の時
 打このり程も深きお茶の丸
 空もかゝる程も清く清りのむ
 冷きや床にせ飯の時重き
 無つてく空もかゝる程のむ
 まりねハタきめは重のむ
 白あたるふくく是く重のむ
 んねや引板も重のむ
 あり重のむお茶の丸

飯時
 甘石
 相中
 相術
 言吹
 有粒
 一重
 支字
 文何

替へハたねとふくぬ時白ハ
 柴垣も力よあるう御し是
 け秋よまらぬ桜招の重き丸
 粒くよ白の海も茶提存
 うと里や秋もあま生身細
 こくけり菊もあま実屋丸
 啄本をねり人さくく重き丸
 重いよあまの重よ白の重
 人着る白もあまぬ御代小屋

月了
 姐星
 竹燈
 極高
 未白
 免丸
 重丸
 赤重
 御用

野も山も焼て照るる河の水も
土もふるものもくもくは舞本舞
風のねやきして遠き針叩
松の中よみ下し重衣衣外
あつらふ言次あるや春の句
別松のねやきし名にぬ下し舟
あえぬもくもくは舞本舞
もみやうもくもくは舞本舞
是はむ舞は舞本舞もくもくは舞本舞
無名

佐持のまよはさうの舞本舞
初冬を付下きくもくもくは舞本舞
竹もみぬまつよ舞本舞
物もみぬまつよ舞本舞
つやもみぬまつよ舞本舞
舞本舞もみぬまつよ舞本舞
わのうけもみぬまつよ舞本舞
わつまつまつまつまつまつまつ
組合せもみぬまつよ舞本舞
の考

蓮葉の春の色を馬や屋に
 くるまの清魚かろくは為葉外
 けあうてつて漢る礼者外
 背はあしちきくまはし年男
 よまて知くまは傳も何る秋明外
 人のゆふ知くハ教あー海しむ
 春くくろ海くやうく如鏡い
 母山をさるまきしきーのろく外
 雪くくも遠き小嶋の懺く外

船云
 蓋水
 共葛
 一約
 卷之
 之甫
 漁友
 水水
 渡茶

雪あうくく寒あうくく春終葉外
 十月ても海くくろくは其の葉
 枝打戸も明ぬくまーハ心嘆
 為角おもおまよはし子の上
 人々けよふ魚くもる市場く外
 去てくハ春くくの遠く浅衣く甫
 春葉の冬くくくまぬ蒼外
 一の葉よくく心てゆぬ初冬
 うきつてもて提て枝のまもく外

海く
 海山
 末室
 一節
 分尾
 甫く
 春三
 千瑞
 为一

廿五日

廿三日

友の秋や明あはれハ昔逢き
 秋白和及ぬ空へ暮のむく
 暑さをあはれむこの月んハ
 庭先やあてきて遠き其のふ
 川流い如くくくく学なれ
 吟ふんはゆる性の子人其
 くむとあはれぬ年の傍りハ
 七夕も待をせり竹麻几
 秋はまて候り空行四月ハ
 徳彦 汝守 支英 梅野 真雅 大野 茶友 下由 権長

かつ秋やあはれハ昔逢き
 秋白和及ぬ空へ暮のむく
 暑さをあはれむこの月んハ
 庭先やあてきて遠き其のふ
 川流い如くくくく学なれ
 吟ふんはゆる性の子人其
 くむとあはれぬ年の傍りハ
 七夕も待をせり竹麻几
 秋はまて候り空行四月ハ
 徳彦 汝守 支英 梅野 真雅 大野 茶友 下由 権長

号やせりしきりあるはゆり
 見えの何る空をやはゆりむ
 霜月や市日の照るつき店
 東の白きよゆり結み結る事
 待ぬ夕のさる中よりむよ句
 見ておれはさる行消ぬ雪の人
 名月やよきゆり合て風と雪
 何れもさる雪のぬき為結
 小藪より出ぬけてはぬ為水
 清風
 白我
 復民
 青園
 竹山
 竹桐
 岸了
 碩水
 結依

水新や田中の家の垣おるそ
 枯草や水に流るるさるぬ時
 海山のあしきと男は火桶を吊
 能の隈より見えはしけの雪
 何れもさる一里さるき結聖は
 号や共さるさる遠く結
 海山の万の里はゆりさるのむ
 人ハさる小家さるて月よ梅
 新屋や新の何れもさる結
 波回
 百古
 杜疎
 少茶
 蒼山
 桐古
 由岐雄
 梓山
 新着

かつきいよきの秋一帯萩世
 又々々々々の実子等一帯作
 綿子一子依いよきの留ま枯れ
 白の巾やぬるむし又て為湯
 乾くのか乾くやうぬのむ
 初重宿四五尺柄してしよる
 ぬく芽のぬくすゝある一葉は
 木末さやもるも又ゆるぬの約
 下草や子生れるむし一の壳
 小府 聖宿 杉門 海子 白守 概五 枚水 拾推 月之

かつきの秋子にまゝしてうらまき
 又下り萩のちりくく下の門
 遠まらぬものいよきまよれまに
 湖のぬく人出てある余幸萩
 一帯一帯ぬく又て柄重宿
 綿の厚り言ひり年の留ま枯れ
 白乾のぬきをぬくむし男
 田舎や号別てある一本
 草屑のぬぬけりくく一の葉
 小府 聖宿 杉門 海子 白守 概五 枚水 拾推 月之

追加

藤の葉を岩のいまをてふくし林 大サカ の庭
 舞上陣ゆりも雪の車音は アハ 藤乃
 雪よ若くはほそくは イ 藤乃
 雪の向ききりり雪の音 曉音
 濁りあき流きよむのきりり イ 蒼翠
 もの雪の細いやき イ 藤乃
 海よ入る程の光るや雪の山 一矢
 摺合して雪よ先へつる雪音は 儂と

藤よ入る程の光るや雪の山 一矢
 摺合して雪よ先へつる雪音は 儂と
 雪の向ききりり雪の音 曉音
 濁りあき流きよむのきりり イ 蒼翠
 もの雪の細いやき イ 藤乃
 海よ入る程の光るや雪の山 一矢
 摺合して雪よ先へつる雪音は 儂と
 雪よ若くはほそくは イ 藤乃
 舞上陣ゆりも雪の車音は アハ 藤乃
 藤の葉を岩のいまをてふくし林 大サカ の庭
 藤よ入る程の光るや雪の山 一矢
 摺合して雪よ先へつる雪音は 儂と

二

見てあるよ約瓶もねを秋の暮
梶の葉や舟の葉のよき舟の
舟の雪は若草してのよき舟
楳の葉よ舟のよき楳の葉
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟

丘外
舟水
柳餅
香南
赤二
梅碓
白英
亭こ
茗園

舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟
舟の雪は若草してのよき舟

月白
井畝
巴山
色向
梅志
方井
茶漬
柳煙
喜窓

遠くはくを返す信水ハ ヒゼン 布園
 を化してゐる爆中や詠の香 イナハ 聖金
 房を垂や一秋吹き一母よま イナハ 聖金
 寺のうらると又てゐるや門柳 カシコ の中
 を解るれハ燃き命一物の毎 カシコ 吾若
 留まり下海もすんき カシコ 掃若
 葉のむやんよりもの志 イナハ 橋中
 枕笑や水のふらふら イナハ 竹雅
 ちるゝある響のり イナハ 己水

是多見て又ても替る イナハ 且夏
 青いれの捨り イナハ 洞和
 又下 イナハ 夢
 是中や イナハ 一柱
 はま イナハ 好水
 風待て イナハ 丸園
 心 イナハ 市儀
 多 イナハ 市儀
 新 イナハ 池

五月の下よ遊のや 虎の灯 イカ 燈籠
 花とる地を 出たて梅の屯 二仙
 松の枯を 心づつ 磨りて 真の水 灯籠
 おみせを 引い？えろ 餅の湯 ヲナリ 三松
 山原むの 舟や 柳の 園き サカミ 子年
 廻板よ くらぬ 舟や 幼ね 魚 イツ 子鳥
 思ひ出て 焼酎考る や 真の高 下子 旭宗
 そのまよ 真ら 舟の 一は くれ オク 宿曜
 小山や 雪火の けろ 舟 跡を 登 三泉

舟堂
 梅月
 仁孫
 旭 コニハ
 重真 テハ
 重輝
 團考
 の亭
 松水

まゝやちねのよまゝの真
ちまゝおしほのふ家のなまゝ
ろくやちねのよまゝの真
ゆるしねまゝのよまゝの真
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ

生石
川原
桂傳
旭峰
一子
甘松
下屋
探水
梅岩

月まゝのよまゝの真
水山(めま)のよまゝの真
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ
まゝおしほのふ家のなまゝ

麻琳
谷館
桂城
一傳
素城
巨川
西角
佳一

身をたづねて風もあぐのよき春を
 雅さハ名世に情も過ぐく白今 文如
 夏遊やよきまきまの籠の春
 あり
 市情一十咲や望遠の打の目
 青吟
 い〜〜名工すハ名世一麻の春
 好文
 一橋ありて〜〜も世や世の月
 無水
 一〜〜男茶の仲間もまじり
 清白
 降〜ぬも〜幸ふ春を〜るのむ
 重浦

大海ハ風あり〜や春の月た 龍風
 一色の〜んつあり〜る深き川 四山
 柳〜る〜〜〜〜柳うれ 水島
 玉如の〜を〜〜子苗ハ 一松
 何〜梅の水あり〜〜〜飛ける 春産
 四方〜〜〜〜〜〜〜〜〜 松島
 手〜〜〜〜〜〜〜〜〜 桂葉
 十月の〜の〜〜〜〜〜 一皇
 足〜〜〜〜〜〜〜〜〜 由誓

大橋の音まゝいゝまゝの古の聲
 柳引下満ぬきくやゆり楳火
 柳くまれはきもいゝはあ葉は
 川音の打ち青は月日の橋
 春多しよ屏風も重平小松時句
 柳の煙もかきく付て壁の影
 能く一平のけしきや初水
 春をきえて身も春は秋の掬
 めくれは回一子業や雪の象

遠流
 松竹
 抱儀
 卓那
 為山
 惟存
 得春
 春と
 葉古

鉦くくく象は本原一白を膏
 さいさの原一へやや山楳
 春の葉や春をきしる春の雪
 楳のけしきや初水や柳丸
 けり春や春のてある山の白
 風流下楳てるるやや四十のら
 春のけしきや初水や柳丸
 けり春や春のてある山の白
 風流下楳てるるやや四十のら
 春のけしきや初水や柳丸
 けり春や春のてある山の白
 風流下楳てるるやや四十のら

氷壺
 尺外
 古也
 雪哉
 山外
 組々
 月村
 魯人
 善海

まつさきのくさききをかめての晴
 晴鴨よ他は雨もくもきむ
 号の静よ出夏夕の静よき
 子子や波揺るまゝのくの水
 共事を相の揃もはなれり
 雪計の鳩ねつらりやうら
 山川や舟のちるれと秋の空
 具焼や脊中 冬うらふむり
 是は向るむらやうまは 継 白

冬季
 継々
 古山
 卯月
 仙鹿
 舟抄
 由之
 菅丸
 瓦村

果の向るむらうハ春とは五月の白
 付て足と人をあふまききり
 夕暮や机もあせては 桐
 冬如くまのいもあやや物ゆき
 芦の葉よまきてハ様し月の影
 いもあて表うらぬあの子
 梅もまきあやうらむら月ね
 柳もまきあやうらむら月ね
 打つて八月の南

素伯
 不
 組々
 好甫
 秋香
 きく雁
 波靜
 弄化
 和堂

山邊は陽天をくまの月
ハ瀬うもよの森の影の木
まきまきまきまき
戸のねハ催ひまぬや秋の句
多水や柳まの約瓶
此屋は秋まきまき
待まよるまの世まき
一住つくや鳥のまの家

まきまき
ト子
大鵬
岩山
山子
山方
杜仙
の

狭き月よしるもあぬ余りハ
かたハしるる相をしら
十ふよ唐まきまき
秋の文ハまきまき
待まよるまの世まき
人別て催ひまぬや秋の句
ゆきまきまきのまき
催まよるまの世まき
りまよるまの世まき

又
一
一
一
一
一
一
一
一
一

枯れしきまの木のなき神
月の角ふやまの作てきえり
名月や楢くまのさけり
秋通しよ春の何事しよ春の
後免つめて楢の結りよ小縁
あつてしよ春のさけりよ春
もあつてしよ春のさけりよ春
屋きよやのさけりよ春のさ
神の何や神のさけりよ春

四端
一様
宿翁
乞雄
帰翁
月翁
丹翁
酒翁
月翁

新翁や風掃る百よ晴いり
聖なるぬ命やりの仁生春
聖なるぬ命やりの仁生春
様なるもあつてしよ春のさ
春のさけりよ春のさけり
春のさけりよ春のさけり
春のさけりよ春のさけり
春のさけりよ春のさけり
春のさけりよ春のさけり

新翁
松翁
与竹
頌翁
翁翁
生翁
主秋
春吟
友松

風の行果や松雪の飛ぬ山
一流に流るる河の雄の袖
二之角ん浴て出るやそ腕
旅者も我もさむらふ如帰
打たるの音は川に流るる
物さるる影をぬくや名も
傳へるる時よアせてうみの重
けさやよ出る如月の小字丸
子緒の馬や夕紅に南の西風の

雪山
号所
南池
体中
渡江
五桂
一是
柳女
蕙女

庭もなまき柳をよのまきりけ
水も影掃るるあまのうら
蒼と白くしてあまの冬のあ
月澄て柳もハ誰も居ぬ秋ハ
揚げて秋をさるる小川丸
賞物の舞浜手よアゆる子丸ハ
とまらぬをよく芭蕉のあまの
毎時中葉のつらねよそへ飛
岸草のよもけしきさるるあまの

若梅
雄々
作長
一水
月夕
三和
一歩
素心
の柳女

春りく積殿も冬のこのよへは
空をに下りて来るも世に逢はるは
人の目をもまうして来るも大は
叔母も序の跡にし子もは
心をき人にもよみ枯野に
ちり交る油きてもなき楳も
花もくそ小多つし重茂もは
白くもよのいろ二月の雪もは
七夕や秋の萩もく明あき

井崎
木更
辛梅
繁茂
曉山
新里
枕里
梅田
乐高

洞代もつ微子隈もなき月照も
又も多しを催し心そぬ柳も丸
そやもよもつし世ぬや生踊
人ハ心もきりも一異もさくも
近も序も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も
折も折も折も折も折も折も

縁高
山南
帆風
英高
里梅
雪可
兔丸
ほ水
新古

欠納りくく自心の後初る事
 揚る事よ控りし事 葛雨屑
 五月句や古来馬奈の厚も地
 世々末よ成て多ゆりけりきけ
 そゆも又号りあき なる生か
 夕暮や帰り出下り 爲菜捨
 川魚よ心をほし 里や落の屯
 字よ為し 宵もあきよ 大蛾
 りあき出て 絶ふ月のわらふ外
 般柴 十口 第里 葛嶋 白山 蒼池 猪産 静産 伯史

梅の乃心くくの遠出初る事
 友のそ程時よあを 裁より
 夕暮と竹も 見えぬ夕了
 月と人のあき為し 夕 離の鳥
 是を待月も同じ 月白森
 舟はゆへ 壽之の向ふ 重箱ハ
 名残もいさして 霜端の縁ハ
 是の越打 壽之を 信りし
 久我 折産 水産 詠久 送関 梅笠 中御 壽好

某の世をアノ事ノ初ノ意ノハ
 尾の松子命作アノ世ノ事
 書子者アノ事ノ始ノ事
 洲口也松子命作アノ事
 桂係アノ事ノ始ノ事
 多き事ノ始ノ事
 西ノ事

惺庵書目

七部集連句早見

折本

刻成

標注七部集

近刻

去辣伊勢紀草寐轉行

合本

刻成

自然堂千句

全

鳳朗翁叢句集

全

同 二編

全

東都十軒店 播磨屋勝五郎梓

